

「国際文化都市」とは、文化的な国際交流・多文化共生の都市というよりも、国際的に文化の中心という評判をとっている都市とおさえる。

モードないし流行は、「真似したい」と思わせる側（発信者）と、思う側（追従者）の関係、つまり流行の発信や追従が可能な技術的・経済的条件があって、成立する。

流行現象1＝モリエール「町人貴族」1670年（鈴木力衛訳）

仕立屋の親方「ごらんください、これを。これは宮廷でもいちばん立派な、趣味のよい礼服でございます。」…

ジュールダン氏「これはいったいどうしたんだ？ 花を下向きにつけたな。」…

仕立屋の親方「立派なご身分のかたがたは皆こんなふうにしていらっしゃいます。」

ジュールダン氏「ほう、じゃこれでよろしい。」…

仕立屋の職人「御前さま、職人どもに祝儀をおつかわしてくださいませ。」…

ジュールダン氏「御前さま！ ふだんから立派な身分の人らしく振舞ってきたおかげだな。いつも町人ふうにしていたら、御前さまなんて呼ばれっこないて。」

流行現象2＝ペロー「シンデレラ」1697年（天沢退二郎訳）

貴婦人たちは、みな、いっしょうけんめい、お姫様の髪型や、着ているものをながめました。もし、これだけ美しい布や、腕のいい職人さえ見つかったら、明日にでもおなじようなものを手に入れたと思ったのです。

1 流行の出現

社会変動

身分制度の弛緩により、金（カネ）次第で身分不相応な装いや振る舞いが可能。

貴族たちは、中世においては戦士（騎士）、領主として所領経営で生活していたが、近世においては騎士の地位が低下、所領経営も苦しくなる。

一方、平民は、君主が軍人や官僚に実務能力のある平民を登用したこともあり、経済力をつけて貴族的な生活を営んだり爵位を買って、地位を上げる。

また、宮廷として、中世には大貴族が各地の所領で独自の「小宮廷」を開いたが、中央集権化が進んだ近世には君主の宮廷だけが強化化。

近世の貴族は宮廷に伺候して（宮廷貴族となって）、国王の恩顧を得ようとする。

国の中心＝宮廷

君主は日常生活として、大臣・書記などの実務家とともに政治をおこなう。

王族たちとともに家族生活を送る。

芸術家などを回りにおいて、学問や芸術を振興する。

宮廷貴族や「寵臣」たちに「恩顧」を振りまく。

宮廷人は、「国王のお気に入り」という評判を得れば、周囲から注目されるので、自分が国王に近づき、しかも他人を出し抜こうとする。

ヨーロッパの流行の中心＝フランス宮廷

当時フランスと言えば、面積・人口・陸軍力においてヨーロッパの「大国」。

その中心として、宮廷においては、国王と、国王に近い人たちに注目が集まり、
宮廷の外では、宮廷の情報をもたらす人たちに注目が集まる。

宮廷からは、公式または公認の出版物・肖像画・版画・暦・メダルなどだけでなく、
噂・手紙・覚書、宮廷人の服装・振舞いを通じても情報が発信される。

フランスの特徴＝イギリスやオランダに比べて不寛容で不自由

宗教批判・政治批判は検閲（出版統制）にかかるため、発言しにくい。

実業に関する話題は、貴族が実業を禁止される身分制度のため、発言しにくい。

国王からの特権が、人の地位上昇にも産業の発展にも不可欠。

上流の人々が熱中できて危険の少ない話題は、「良い趣味 bon goût」。

2 パリ

王宮の所在地

ヴェルサイユは、パリ市の中心から南西に約 20km 離れた郊外に位置し、

1660 年代から宮殿造営が本格化、1682 年に国王と宮廷が移動した。

爾来、ルイ 15 世の幼少期（摂政時代）を除き、1789 年まで宮廷はここに定着。

パリは、中世以来国王が不在でもフランスの *ville capitale* 「首都」「第一の都市」、
歴代国王の宮殿としてはシテ王宮・ルーヴル・テュイルリー宮殿がある。

首都パリ

人口規模は、11 世紀中頃から 18 世紀中頃までアルプス以北のヨーロッパで最大。

都市機能として、司教座都市・大学都市。

行政都市として、高等法院など王国の重要機関の所在地。

セーヌ河の水運に依拠する河港都市であり商都。

貴族の必要を満たす商人・手工業者が多数。

パリとヴェルサイユの貴族の生活

貴族は一般に、地方に自分の領地と邸宅を持つが、そのほかに

ヴェルサイユでは、国王から宮殿の一室を与えられることを「名誉」とする。

宮廷人としての洗練された言葉づかいや振る舞いが要求される。

パリでは、私邸でサロンを開くなどして情報交換をし、宮廷の情報も伝えあう。

3 モード産業

小売の形態

中世以来、行商（呼び売り）または訪問販売または定期市といった形態があり、

常設店舗での小売は、逆に必ずしも一般的ではなかった。

17世紀中葉以降、貴族向けの洗練された店舗が出現し、服飾小物など流行品を扱う。

情報誌・印刷物

情報誌の先駆けとして *Mercure François*（1605～43年）があり、それに続いて、

Mercure galant（1672年創刊）が、政治を話題にしない条件で出版特権を得た。

これは、1678年に国王御用達の仕立屋によるモード画の掲載を始める。

新しいタイプの店舗の絵も掲載し、買い物をする場所や方法の転換を促す。

パリのガイドブックや住所録も、教会や名所の案内より流行の店の情報を掲載する。

貼り紙（ポスター）から、店が出す請求書・包装紙のデザインまでが広告になる。

モードの都パリ

小間物商（リボン・レース等を扱う服飾雑貨商）が、18世紀パリで最大規模の産業。

仕立工は、衣服の縫製を担当し、男女別に分業していた。

モード商は、小間物商から派生したと言われるが縫製もする職として1776年に独立。

「フランス」を売り込む

重商主義政策として、1660年代から関税や輸入規制により、国内の手工業を保護。

国王が特権を与えて、ガラス(鏡)・家具・織物・レース・磁器などの技術を保護。

リヨンの絹織物、スダンの黒ラシャなど、地方特産品も保護。

それでもイタリア趣味があり、ルイ14世は音楽家リュリや彫刻家ベルニーニを招く。

イギリス趣味もあり、ルイ16世は英語を習い、マリ=アントワネットは英国式庭園を造った。

パリに魅せられる外国人

ガイドブックなど出版物の翻訳、旅行ガイド、パリ滞在記録などを通じて情報が拡散。

パリからの情報誌や商品見本、さらに商品そのものも国外に流通していく。

文献案内

饗庭孝男編『パリ 歴史の風景』山川出版社、1997。

リュック・ブノワ『ヴェルサイユの歴史』、瀧川好庸ほか訳、白水社・文庫クセジュ、1999。

イヴ＝マリー・ベルセ『真実のルイ 14 世 神話から歴史へ』、阿河雄二郎ほか訳、昭和堂、2008。

ピーター・バーク『ルイ 14 世 作られる太陽王』、石井三記訳、名古屋大学出版会、2004。

ジョナサン・コンリン『フランスが生んだロンドン イギリスが作ったパリ』、松尾恭子訳、柏書房、2014。

Natacha COQUERY, «The Semi-Luxury Market, Shopkeepers and Social Diffusion: Marketing Chinoiseries in Eighteenth-Century Paris», in: Bruno BLONDE, Natacha COQUERY, Jon STOBART and Ilja VAN DAMME (eds.), *Fashioning Old and New. Changing Consumer Patterns in Western Europe (1650-1900)*, Turnhout, Brepols, 2009, pp. 121-131.

Joan DEJEAN, *The Essence of Style. How French Invented High Fashion, Fine Food, Chic Cafés, Style, Sophistication, and Glamour*, New York, Free Press, 2005.

Id. *How Paris Became Paris. The Invention of Modern City*, New York, Bloomsbury, 2014.

ディドロ、島尾永康編・解説『百科全書 産業・技術図版集』朝倉書店、2005。

ノルベルト・エリアス『宮廷社会』、波田節夫ほか訳、法政大学出版局、1981。

ジョアン・エントウイスル『ファッションと身体』、鈴木信雄監訳、日本経済評論社、2005。

Alexandra FAU, *Des métiers de la mode aux maisons d'art*, Rennes, Editions Ouest-France, 2009.

Id., *Histoire des tissus en France*, Rennes, Editions Ouest-France, 2010.

深井晃子『ファッションから名画を読む』PHP研究所・PHP新書、2009。

深沢克己『海港と文明 近世フランスの港町』山川出版社、2002。

同『商人と更紗 近世フランス-レヴァント貿易史研究』東京大学出版会、2007。

Claude GOVARD, Joël CORNETTE et Emmanuel FUREIX, *Souverains et Rois de France*, Paris, Hechette livres-Editions du Chêne, 2008.

長谷川輝夫『聖なる王権ブルボン家』講談社・選書メチエ、2002。

同『図説 ブルボン王朝』河出書房新社、2014。

橋本周子『美食家の誕生 グリモとく食のフランス革命』名古屋大学出版会、2014。

ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リンシュ『ヨーロッパのサロン 消滅した女性文化

の頂点』、石丸昭二訳、法政大学出版局、1998。

飯塚信雄『ロココの時代 官能の十八世紀』新潮社・新潮選書、1986。

木村尚三郎『パリ 世界の都市の物語』文芸春秋、1992。

北山晴一『おしゃれの社会史』朝日新聞社・朝日選書、1991。

Antoine LILTI, *The World of the Salons. Sociability and Worldliness in Eighteenth-Century Paris*, trans. by Lydia G. Cochrane, Oxford, Oxford Univ. Press, 2015.

見市雅俊『ロンドン=炎が生んだ世界都市 大火・ペスト・反カソリック』講談社・選書メチエ、1999。

三宅理一『パリのグランド・デザイン ルイ十四世が創った世界都市』中央公論新社・中公新書、2010。

モリエール『町人貴族』、鈴木力衛訳、岩波書店・岩波文庫、1955。

ペルーズ・ド・モンクロ『芸術の都パリ大図鑑 建築・美術・デザイン・歴史』、三宅理一監訳、西村書店、2012。

二宮宏之『フランス アンシアン・レジーム論 社会的結合・権力秩序・叛乱』岩波書店、2007。

二宮素子『宮廷文化と民衆文化』山川出版社・世界史リブレット 31、1999。

ミシェル・パストゥロー『青の歴史』、松村恵理ほか訳、筑摩書房、2005。

シャルル・ペロー『シンデレラ』、天沢退二郎訳、ミキハウス、1987。

ウィリアム・リッチー・ニュートン『ヴェルサイユ宮殿に暮らす 優雅で悲惨な宮廷生活』、北浦春香訳、白水社、2010。

佐々木真『ルイ 14 世期の戦争と芸術 生みだされる王権のイメージ』作品社、2016。

William H. SEWELL Jr. «The Empire of Fashion and the Rise of Capitalism in Eighteenth-Century France», *Past and Present*, no. 206, Feb. 2010, pp. 81-120.

徳井淑子『図説 ヨーロッパ服飾史』河出書房新社、2010。

戸矢理衣奈『下着の誕生 ヴィクトリア朝の社会史』講談社・選書メチエ、2000。

角田奈歩『パリの服飾品小売とモード商 1760-1830』悠書館、2013。

角山栄・川北稔編『路地裏の大英帝国 イギリス都市生活史』平凡社、1982。

内村理奈『モードの身体史 近世フランスの服飾にみる清潔・ふるまい・逸脱の文化』悠書館、2013。

ロザリンド・ウィリアムズ『夢の消費革命 パリ万博と大衆消費の興隆』、吉田典子ほか訳、工作舎、1996。

山田登世子『贅沢の条件』岩波書店・岩波新書、2009。